

内なる過去へ

—ウェルズの『タイム・マシン』再考—

金井嘉彦

SF=科学空想小説 (science fiction) という言葉がまだ一般的ではなかったころに科学をそのインスピレーションの源泉に用い、空想小説を数多く書いた H・G・ウェルズ (H. G. Wells) には、時代を超えているという印象が強い。事実彼は近未来の出来事を予言し、人々を驚かせた。しかし、その実彼の小説は、当時の社会が抱えていた問題を、形こそ変えてはいるものの、むしろ忠実に描いている。本論では彼が本の形で出版した小説としては処女作にあたる『タイム・マシン』(1895) を取り上げ、いかに彼が未来ではなく彼が生きた時代に縛られていたかを検証し、さらにこの未来への旅が彼自身の過去への旅であったことを見てみたい。

I

この小説が、どのような物語であったかを確認すると次のようになる。

語り手であるわたしは科学者・発明家と思われる人物のもとを訪れ、新しい発明品、タイム・マシンについての発表を聞く。説明を聞いても信じようとならない人たちにその科学者はタイム・マシンの小型のモデルを見せ、皆の前でその機械を未来に飛ばしてみせる。翌週までには人が乗って時間を移動することのできるタイム・マシンは出来上がり、彼は皆が集まる前に未来へと旅行をする。その未来で経験したことを彼は後に皆に聞かせる。それによると、彼が旅した未来は、西暦 802,701 年で、そこでは人間は二種類に分化している。一方は現在の貴族の末裔であろうと推測されるエロイ (Eloi) で、美しいがか弱く、知能程度の低い人間として描かれる。彼らは

地上に住む。もう一方はモーロック (Morlock) と呼ばれ、現在の労働者階級が地下に追いやられて、そのままそこに住むようになったと考えられる人種である。目は夜行動物のそれのように光り、光にあたらないため肌の色は白く、その姿は猿のようで人間とは思えない。彼らは昔のなごりで今でもエロイに服などを供給している。しかしおぞましいことに、地上人と地下人のヒエラルキーは逆転し、今ではエロイはモーロックを怖れて暮らしている。その理由はモーロックがエロイを食料にしているためである。未来の世界は、必ずや(彼にとっての)現代よりも進歩していると考えていたタイム・トラヴェラーは失望する。さらに未来に進むと、そこにはもはや人類は存在せず、年老いて勢いを失った太陽の下でただ蟹のような生物がうごめいているのが見えるだけである。以上が彼が目にしてきた未来で、とても明るいものとは言えない。彼はその後消息が分らなくなる。二度目の時空間の旅行で帰らぬ人となったことがほのめかされて、この物語は終わる。

この物語で描かれる未来世界には、いくつか興味深い点がある。まず第一の特徴は、未来人の劣等性である。未来に到着した彼に近づいてきた未来人は「ほっそりとしていて、多分4フィート程の背丈」をし、「とても美しく優美ではあるが、描きようもないほどひ弱」で、「紅潮した顔は結核患者特有の繊細な美しさを思いださせ」る(第3章)¹⁾。この弱さには何度も繰り返し言及される。第4章では、この未来人は「未来のか弱いもの」(“fragile thing out of futurity”) と呼ばれ、あまりにか弱そうなので、ボーリングのピンのように投げ飛ばせそうだとされる。

この弱さは体だけにあてはまるのではない。頭脳、精神にも見られる特徴である。どのようにしてこの未来世界にやって来たかを説明しようとして、タイム・トラヴェラーはタイム・マシンと自分を指差す。時間をどう表現したらいいかわからず、彼は太陽を指差す。すると未来人の一人が、彼の身振りを真似、さらに雷の音を真似て彼を驚かす。彼が太陽から雷に乗ってやってきたと思っている未来人を見て、彼は「低脳なのか」と考える。未来人が着ていた服、か弱い手足、か弱い顔立ちからもすでに予想されていた答えが、

ここで確認される。

品詞は具象名詞と動詞だけで、抽象名詞は皆無に等しく、比喩的表現も乏しく、また文章はたいてい二語から成り、簡単なことしか表現できない、とされる彼らが使う言語からも、未来人の知的程度の低さは示されているといえよう。

未来人の仲間のところに連れて行かれたタイム・トラヴェラーは、彼らと一緒に果物を食べながら、言葉を習おうとする。彼は果物をかかげ、身振りによってそれをかれらが何と呼ぶかを聞き出そうとする。最初は彼の意図を理解しえなかった未来人も、すぐにその呼び名を繰り返して発音してくれるようになり、未来語のレッスンは始まる。ここで興味深いのは、彼が子供たちの中にある教師のような気がしてきたという一節であろう。教えてもらっている身ならば、生徒であると感じるのが普通であろう。その関係を逆転させているのは、彼が未来人に対して持っている優越感以外の何物でもない。未来人は、ひ弱で、か弱いと判断していたことから分るように体格的に彼の方が勝っているという認識がある。知的にも、未来人の知能程度を現代——とは言ってもタイム・トラヴェラーにとっての現代——の5歳児程度と判断を下していることから分るように、自分の方が優れているという認識がある。この優越感が、身の丈4フィートの未来人をまさに子供へと姿を変えてしまっているといってもよい。この教師と生徒の関係には、支配の関係が示唆されていることにも注目しておいてよい。タイム・トラヴェラーは、未来人の「無能」なのとは対照的に、すぐさま名詞を20ほど覚え、「食べる」という言葉を習得する。しかし困ったことに、未来人は飽きっぽい性質で、持続的に一つのことをすることができない。この飽きっぽい性格は、単なる性格の一面を示す指標ではなく、道徳性全般に対する評価となっている点は興味深い。体格的、知的にも劣っていた未来人は、同じように道徳的にも劣っていることがここで示されるのである。

これまでのところで示されたのは、未来人が体格的、知的、精神的あるいは道徳的な面において「劣っている」ということであった。それによって未

来人は否定されるべき存在となる。未来人はさらに、性的にも「劣った」存在である。それはユニセックス化による。タイム・トラヴェラーは、皆が同じ形の服を着、同じ柔らかい、毛のない顔つきをし、同じ少女のようなポチャッとした手足をしていることに気がつく。服装においても、現代において両性の違いを示す肌目やしぐさにおいても、未来人には違いは見られない。彼はこのユニセックス化を当然の帰結と説明する。

男性の力強さ、女性の優しさ、家族制度、職業の分化は、単に肉体的力に頼る時代の戦闘上の必要物にすぎないのだ。人口のバランスが取れ、人がたくさんいるところでは、子供を多く産むことは国家に対する福音というよりはむしろ罪悪となる。暴力がまれにしか起こらず、子孫の生命が保障されていれば、有能な家族はより必要でなくなる——というよりはまったく必要でなくなる——し、子供との関係における両性の区別は消えてしまう。(第4章)

現代においてすでに始まっているというユニセックス化についての評価も、これまで未来人について認められた性質の評価同様中立的ではありえない。それは彼が未来に到着したときに感じていた不安を見るとよく分る。彼は、「人類に何が起っているだろうか。もしこの間に、人類が男らしさを失い、非人間的な残忍で恐ろしく力の強いものになってしまっていたら」どうしようか、と考える(第3章)。これを見ても分るように、基準となっているのは男らしさであり、とするならば、ユニセックス化が意味するところは、女性が男性に近づくということでも、両性が歩み寄るということでもなく、男性が好ましくないと想定されている女性に近づくこと、つまり女性化ということであり、ここに肯定的な評価を見出すことは不可能である。この「非男性的」、「女性的」という見方は、後に述べることとの関連で重要な意味を持つ。

これまで見てきた未来人の特徴は、エロイの分析から得られたものであっ

た。ウェルズが描くもう一つの未来の人種モーロックには、さらに「劣った」性質が見出される。タイム・トラヴェラーが

丘を見ていると、3度白い影を目にした。二回は白い、猿のような生き物が一人でかなりすばやく丘を上っていくところが見えた。一度は廃虚あたりを3人で黒い人の体を運んでいるのが見えた。足早に動いていた。どうなったかは分らなかった。(第5章)

最初は幽霊だと思ったその影は、後に彼と遭遇して「四つ足でか、ただ腕を低く下ろした状態でか走って」逃げていく。この後も何度も「猿のようである」(“ape-like”)と繰り返し形容されるモーロックは、人類の祖先とされる猿の状態に先祖返りしている。モーロックを目の前にしたときに野獣への本能的恐れを感じたタイム・トラヴェラーであったが、まさにモーロックは野獣の状態に戻っている。彼らが人=エロイを食らうこともこのことを示している。

ウェルズが描く未来世界の第二の特徴は、未来人の性質をタイム・トラヴェラーが先験的に知っている点にある。彼には未来人のことが突然理解される。じっくりと彼らに混じって生活をする中で彼らについて判断をするということはない。不思議なことに彼らのことを、あたかも前から知っていたかのように、あたかも予想していたかのように、すぐに理解してしまうのである。初めて目にする未来人と場合によっては戦わねばならないことを覚悟していたタイム・トラヴェラーは、近づいてきた未来人の体格を見て突然自信を取り戻す(第3章)。すでに見た未来人の知能程度が低いのではないかと判断を下す場面でも、たった一人の未来人の反応を見て、西暦約80万年の人間はすべての面で自分たちより進んでいるのではないかという予測と期待に満ちた問いに対する答えを、彼は即座に出す。その性急さを不自然と感じることは、不思議なことにはない。テキストによれば、その判断は、未来人が着ていた服、か弱い手足、か弱い顔立ちからすでになされていたが、ただ留

保されていたにすぎないという。服装や姿形と、知的レベルがなぜ結び付けられるのか、これは自然に生じる疑問であろう。

未来人の飽きっぽさに呆れ、彼らが道徳的にも劣っていると結論を下す場面でも同じことが起こっている。一つの事例はすぐさま一般化される。未来人は細部にわたって幅広い価値観に基づいて描かれる対象ではなく、一般化され類型化される対象であることが分る。この一般化する傾向は、この場面が続く一節を読むと、一層明らかになる。言葉を覚えようとした際の出来事が通事的に描かれたのに対し、次の段落は、その一般化を受けて、共時的語りの中で一般化、抽象的陳述へと変化しているからである。

私をもてなす小さな人たちのことですぐに発見した奇妙な事柄は、彼らに関心を持たないことであった。子供のように、私のところに歓声を上げてやってくるくせに、子供のようにすぐに私のことを調べるのを止め、何か別のおもちゃを求めてどこかに行ってしまうのであった。(第4章)

ここでは、「子供のように」(“like children”)という言葉が繰り返され、未来人がいかに子供と同じ程度の精神性、道徳性しか持っていないかが強調される。そしてタイム・トラヴェラーは、自分でも不思議なくらい早くこの未来人たちを見下すようになる。このようにすぐさま一般的真理へと飛躍できるのは、またそのことに対して何の疑問も感じないことは、未来人の性質をタイム・トラヴェラーが先験的に知っているものから導き出しているということを示す。彼はすでに持っている知識をもとにして、判断をし、類型化しているのである。

第三の特徴としては、一方的表象をあげることができる。タイム・トラヴェラーは、彼らの姿、形、服装を観察し、判断することはしても、自分が彼らにとって同様な観察、判断の対象となっているという意識を持つことはない。自分が「よその」で未来世界に侵入してきた訳の分らぬ人間であるという意識を持つことはない。もちろん未来人が自らを表象するということは

ない。まなざしは常に「彼」から「彼ら」に向けられる。このことは、特徴としてあげた第二点と重要な関係を持つ。

II

以上見てきたように、ウェルズの描く未来人は、知的、体格的、道徳的に現代人よりも劣り、女性化した人間である。未来人はすべての点で現代人よりも優れているはずだという期待と予想を裏切って、すべての面で劣っているその未来は、望まれたものとは違うディストピアであり、逆転した世界、さかしまの世界である。

大人は子供に、男らしさは女らしさへ、力強さはか弱さへ、知的発達とは知的退化へと変化し、世界は鏡に映し出されたかのように逆転した世界となる。西暦約80万年という限りなく遠い未来に進んだはずなのに、そこに見出されたのは限りなく過去に戻ったときに見出されるであろう世界に近くなってしまふ。人々の知能は低く、モーロックが同じ人間であるエロイを食べているということに示されているように野蛮で、獣の状態にまで戻ったと思われるほどである。道徳的にも次元が低いので、助けてもお礼は期待できないと思ってしまうほどである。未来に行ったはずなのに、そこには原始的、あるいは神話的世界が広がる。タイム・トラヴェラーは、モーロックの存在に気がついてからは、エロイたちと同様闇を恐れるようになる。それと同時に火の神話がよみがえる。彼は火を知らぬエロイに火をもたらす「英雄」となる。そしてその火がまた彼の命運を握る鍵となる。ほかにも、例えばタイム・トラヴェラーが井戸を下りて地下世界にタイム・マシンを取り返しに行くところには、冥府下りのテーマを見出すことができよう。モーロックの出現が3度目に確定されるころには、マジックナンバーの復権が見られる。このように、未来は神話的要素に満ちた世界となっている。

このさかしまの世界へと世界を反転させる鍵は、進化論にある。人間がこれまでと同じように進化を続けていくのであれば、未来はさかしまの世界とはなり得ない。しかし進化はどの時点かで頂点を迎え、その後は文明は衰え

ていく。その時点を境に退化が進み、一定程度退化が進むと未来といえどもそこには歴史の中ですでに経験された状態、即ち、過去が現出することとなる。このさかしまの世界へと世界を反転させる鍵は進化論にあるというときの進化論は、したがって退化論を意味することになる。退化という名の鏡に映し出された結果、人間は未来において「劣った」「女々しい」存在、あるいは獣と成り果てるのである。

問題はどの時点で文明が頂点に達するか、頂点に達していることを知ることができるかという点にある。この小説ではある時点で頂点に至ったとされているが、それはタイム・トラヴェラーにとっての現代よりは未来の時点であることは間違いない。ウェルズがこの小説を書いた時期は、この文明の進化の分水嶺がどこにあるのが問題になっていた時期であった。問題になったのは、むしろその境目が過去にあったと考えられていたからである。

ノーマル・スクール・オブ・サイエンス (Normal School of Science) でウェルズに動物学を教えたのは、「ダーウィンのブルドッグ」とあだ名された T・H・ハックスリー (T. H. Huxley) であった²⁾。その後知り合う教師たちの授業とは対照的に、ウェルズはハックスリーの授業に大いなる知的関心と敬意を持って臨んだ。この時期までにはすでに、進化論は単なる種の進化に関する学説を超えて、社会について考える際の方法論をも提供していた。いわゆる社会ダーウィニズムの中で、19世紀後半の社会の中で問題となる、貧民、犯罪者、精神異常者、娼婦、アルコール中毒者、移民は、進化論の強力な磁場の中に引き込まれ、自然選択 (natural selection) によって選ばれない側の不適格者と考えられた。あるいは、有機体としてとらえられた社会の、退化の兆候と考えられた。19世紀の後半には、その点をテーマにした本や論文、パンフレットが数多く出されている³⁾。奇しくも『タイム・マシーン』が出版された1895年は、退化の観点から世紀末の文化を一刀両断のもとに論じたマックス・ノルドーの『ディジェネレーション』の英訳が刊行された年であった。

この退化論で目に付くのは、類型的な思考である。社会にとって好ましか

らざる存在は、すでにある学説に基づいて、そのそれぞれの差異を考慮されることなく、同一の範疇の中に分類される。犯罪学に大きな影響を与えたロンブローゾや、ノルドーの文化退廃論はその好例といえるであろう。社会にとって好ましくないもの、退化していると思えるものに、医学的な用語を当てはめて排除するその論法においては、個々の事例は入念に分析されて他の事例と結び付けられるのではなく、既に出されている結論にしたがって、予定調和的にしかるべき場所を与えられていく。第1章の分析から得られた未来世界の特徴の残り二つ、すなわち、先験的知識と、一方的表象は、このような退化論の類型的還元論的思考から生じるものといってよい。

III

未来世界に見られるのは、単に未来と過去の逆転だけではない。もう一つの興味深い逆転は、西洋と東洋のそれである。言及はさりげなく行なわれる。未来人の観察も一通り終えたころ、事件が起こる。タイム・マシンがなくなってしまうのである。現代に帰れなくなってしまったことに絶望的な恐れを感じたタイム・トラヴェラーは、必死にタイム・マシンを探す。引きずられていった跡を発見し、何者かに持ち去られたこと、甘く見ていた未来世界にも自分を脅かす敵がいることを知る。その跡を辿っていくと白い大きなスフィンクスの像の台座のところまで続いていることが分る。タイム・トラヴェラーは時間を旅したが、空間的な移動をしたのではなく、あくまでも未来のロンドンにきているだけであることを思い出すならば、彼がたどり着いた未来になぜスフィンクスがあるのか、は当然生じる疑問である。彼はそのスフィンクスの台座のところにある扉を開けようとして、石を使って扉を叩いていたが、暑いのと疲れたのとで座り込み、方針を変えて見張ることにする。しかしそれも長続きしない。その理由は「長く番をするにはわたしはあまりにも西洋人であるからだ」という。ここで西洋人を意味するのに使われている言葉は、オクシデンタル(“Occidental”)という言葉であることは注目し値する。この言葉を使ったことで、その対極にあるものが同時に表層

に浮かび上がってくる。歴史的にも帝国主義の全盛期とも言うべき当時の社会において、オキシデントはオリエントとセットになった言葉であり、この言葉を用いるだけでその比較の対象になっている世界を引き出すのに十分な力がある。もし西洋人は長い番をするのが不向きだというのであれば、向いているのがどのような人たちであるのか。言わずと知れた東洋人なのである。

こうして喚起されたオリエントは、他の語や要素、表現法と共鳴現象を起こし、当時西洋人が支配していた、あるいは支配の対象としていた、オリエント、あるいは植民地世界を未来の中に次第に現出させていく。すでに指摘したように、スフィンクスが出てきた。なぜ未来のロンドンにスフィンクスが置かれる必要があるのだろうか。あまりに唐突とも思えるスフィンクスがもし自然なものとなる見方があるとすれば、それはエジプトあるいはオリエントを象徴するものとして機能し、未来世界がこれまでにすでに見てきたような退化した世界に変化していることに付け加えて、未来世界が隠喩的に東洋に変化していることを示す指標となっているということである。ここには人種の退化とオリエントを結び付ける論理が働いている。退化と東洋は奇妙な等価関係に置かれている。このスフィンクスのほかに、グリフィンやパゴダが登場する。また後に彼が地底人モーロックと戦うために武器となるものを探しに出かけるところは、正面の造りが東洋風の青磁の宮殿である。

我々が見てきた未来人の表象のされ方も東洋風なるものの表象と関わっている。未来人の性質として抽出された、知的、体格的、精神的、道徳的に劣るという性質、および女性的という性質は、いずれも植民地の人間を表象するときに用いられた言葉であり、それによって東洋人支配を正当化するのに使われた言葉である。サイドが明らかにしたように、西洋はサイドがオリエンタリズムと呼ぶ特殊な東洋観、東洋人観を作り上げた。特殊というのは、それが事実に基づくものではなかったというよりは、事実を取り込みながらも、それとは離れたところで焦点を結んだ、事実に基づくかどうかということとは関係ないものであるからである。これに基づいて詩人、小説家、哲学者、政治学者、経済学者、帝国官僚を含む夥しい数の作家たちが、オ

リエントとその住民、その風習、その精神、その運命等々に関する精緻な理論、叙事詩、小説、社会詩、政治記事を書き記し、書くことで更にオリエントに対するこの特殊な見方を強化してきた。その結果オリエンタリズムは、オリエントをどんな形であれ扱う際には、例えばオリエントについて何かを述べたり、オリエントに関する見解を権威づけたり、オリエントを描写したり、教授したり、またそこに植民したり統治したりする際には、不可避的にそこに照準が合わせられる、したがってまた常にそこに組み込まれることとなる、関心の網の目の総体となる。これによりオリエントは、あるがままの描写としての'representation'ではなく、まさに代替としての'representation'に晒され、ついには別のものへと姿を変えられてしまう。オリエントはオリエント化され、封じ込められ、政治的、社会学的、軍事的、イデオロギー的に馴致され、支配され、再構築され、威圧されることとなる。つまりは、オリエンタリズムとは、西洋の東洋に対する権力構造を支える固定化されたイデオロギー装置であり、思考様式であり、文化のスタイルのことである⁴⁾。

我々が見てきた、未来人に与えられた属性、体格的、知的、精神的、道徳的に劣り、女性的というのは、このオリエンタリズムの中で繰り返し用いられてきた、ほとんどステレオタイプ化したオリエントの人間の描写法にすぎない。例えば、東洋人が知的に劣っているという判断は、自分たちにとって何が善であるかを知る力がない従属的種族の代わりに西洋人が政治を行うことを正当化する根拠となっていた。精神的、道徳的劣等性は、東洋人の属性そのものであった。女性的ということについては、植民地人、例えばアイルランド人について言われたことであった⁵⁾。タイム・トラヴェラーが最初に見たときから、繰り返し言及されるモーロックの「猿のようである」という属性も植民地人を表象するときに使われた。例えば、アイルランド人は、しばしば猿として描かれた⁶⁾。このように、未来人は、未来人である前に、ウェルズがすでによく知っていた人種であったのである。その人種を描くのに常套的に使用された表現を使って未来人を描いたことが、第1章の分析から

得られた未来世界の特徴の第二点、先験的知識を生み出したのである。未来世界の特徴の第三点、一方的表象も、オリエンタリズムの大きな特徴である。オリエンタリズムという言説によって困い込まれた東洋人には、その中で自らを表象する手だてではなかったのである。

言うまでもなく、未来人が「猿のよう」であるのは、すでに触れたように進化論と深い関係を持つ。退化をするということは、ある意味においては、西洋人の目から見て自分たちが支配していた従属的人種となることを意味しているのである。ここで我々が目にするのは、進化論と深く結びついたオリエンタリズムのあり方である。サイードが言うように、十九世紀後半人種、文化、社会を先進的なものと後進的なものとに分類する類型学が推し進められ、東洋人はかくて嘆かわしい異邦性を共有する西洋社会の中の諸要素（犯罪者、狂人、女、貧乏人）と結び付けられたのである。両者は、互いに支え合い、不可分の関係にあった⁷⁾。

オリエンタリズムとの関係の深さは、未来人の描き方以外にも示される。一つには、この小説の形式からも言えることである。ウェルズの『タイム・マシン』は、植民地主義的冒険小説の古典とも言うべきデフォーの『ロビンソン・クルーソー』と構造が似ている。クルーソーがフライデーという従僕を得たように、タイム・トラヴェラーは、ウィーナという名の未来人を手に入れる。クルーソーが、自分の知らない敵の存在に気がつくのは、小説のちょうど半ばであったことは、そのままこの作品にも当てはまる。次に、タイム・トラヴェラーの時空旅行が未来に向かったことにも、支配をもくろむ意図が読み取れない訳ではない。冒険家は、未知の島、大陸に他の国の人間に先駆けて到着した場合、その土地の領有権を主張することができた。それと同じように、まだ他の国に手のつけられていない未来に行くことができるのであれば、帝国主義を信奉するものにとってこれほど有力な手段はないであろう。西洋の列強がこぞってアジアやアフリカに進出していた時代に、この未来への旅が持つ意味は、それほど無邪気なものではなくなる可能性がある。

ウェルズは未来という未知の世界を描くのに、未来人という未知の人間を描くのに、既知の言葉、表現を使った。それは、進化論とも結びついて巨大な西洋的世界観を形成していたオリエンタリズムの言葉、表現法であった。

IV

話の内容としては複雑とは言えない『タイム・マシン』ではあるが、その語りの構造には意外に手が加えられている。物語全体を語るのは語り手で、その中にタイム・トラヴェラーが登場し、彼が未来で経験したことは、一人称で語られる。語りが二重構造になっているのである。これは、一方で信憑性を与えながら、その一方で疑問視させる怪奇小説や諷刺ではよく見られる手法である。この章では、あまり分析の対象となることのないこの手法が意味するものについて考察する。

この手法に加えて、タイム・トラヴェラーに名前が与えられないことは、さらに未来の物語を空洞化する。語り手は彼のことをタイム・トラヴェラーと呼ぶことにして、本名を明らかにすることはしない。これにより、一人称で語られた未来の出来事は、「わたし」の枠から外に出ることができなくなる。「わたし」としてのタイム・トラヴェラーの話であれば、読者は一対一の個人的関係の中で安心して聞くことができる。しかし、その外側には、その話を責任を持って引き取ってくれる人物は誰もいないのである。このことに付け加えて、当のタイム・トラヴェラーは二度目の時空旅行で姿を消してしまう。こうして彼の話は、責任を持って引き取ってくれる者のないまま、同様に物語の構造的ひずみの中に埋もれてしまう。したがってここで語られる話とは、誰の話であるかも分らず、その語った当人とされる人物もすでにいない、そういう話なのである。その怪しい性質は物語の中でも示唆されている。タイム・トラヴェラーが、タイム・マシンの小型モデルを未来へと飛ばしてみせたとき、まやかしではないかと信じようとはしない雰囲気があった。

この小説の構造とタイム・トラヴェラーに名前が与えられないことに意味

を与えるには、彼がどのような人間として現代に戻ってきたかを考えるのがよい。例えば、翌年に書かれたウェルズの小説『モロー博士の島』(*The Island of Doctor Moreau*)では、ブレンディック (Prendick) は、せっかく都会に戻ってきても、そこで目にする人間の中に「島」で見た、人間に改造された獣を感じてしまい、まわりの人間もいつかは退化して獣性を露にするのではないかという不安に耐えられなくなって街を離れる。それと同じことが、『タイム・マシン』でも起こっていると仮定してみることができる。彼が未来でしてきたことは、退化した人間、人間が退行する可能性を目にすることだけではなかった。彼が未来において、エロイ同様闇を恐れるようになったり、火をもたらす英雄となったことは、逆に言えば、彼自身がそのようなことが必要とされる時代に順応してしまったことを示唆する。この示唆は、彼が「肉に飢えて」現代に帰ってきたことによってその意味合いをさらに強める。肉食主義者であるエロイたちと共に肉を食することがなかったとはいえ、「肉に飢えている」タイム・トラヴェラーは、モーロックと同じ次元にいることを示唆する。食人種を見てきたあとでは肉を見ればその忌まわしい慣習を思い出すことが間違いないと思われるだけに、なおさらである。『タイム・マシン』を発表した翌年の1896年にウェルズが書いた論文を見ると、人間には太古から変わらない要素と後天的要素の二つの要素があり、後者に欠けると問題が起こると考えていたことが分る⁸⁾。タイム・トラヴェラーは、未来において未来人との接触と通じて、その後者の部分に問題を起こした可能性がある。未来人同様の原始的人間に戻ってしまった可能性がある。現代人でありながら、原始人を内に秘めた彼は、言ってみれば複数の時代を我が身の中に持つ人間である。一つの時代だけではなく、同時に別の時代をも生きる人間となった。複数の時代の生き方に、生物的アイデンティティーを引き裂かれた人間となった。それが、彼が二度目の時空旅行で姿を消す理由だと考えられる。自分の中の原始に気が付いてしまった彼は、一つところに居ながら、複数の時代を生きる人間になってしまったのである。その意味では、彼の消息が分らなくなることは、彼の体の中で起こ

ったことを隠喩的に示す出来事であるといえる。こうして彼は一つところに居られない人間となった。時空を漂流するものとなった。物語の最初からタイム・トラヴェラーと呼ばれ、そう呼ぶことの方がふさわしいとされるのはこのためである。

原始の血を内に秘め、そのことを強く意識したのは、作中人物のタイム・トラヴェラーだけではない。ここでウェルズ自身のことを考えてみても面白いだろう。彼にとって進化論の対象は、外にあると同時に彼の内側にもあった。社会ダーウィニズムが社会の中に見出した問題は、彼の内側にもあった。彼の生まれた家は、辛うじて中流階級と言える程度の家であった。売れない陶器屋アトラス・ハウスの暗い地下室は、社会の底辺を思い出させる陰鬱な場所として脳裏に残った。コックニー訛りは時々彼に恥ずかしい思いをさせた。自分の体のことを「直しようのない劣った体」と評し、「40を超えるまで肉体的劣等感にいつも鋭くさいなまされた。それはどんな哲学によっても和らげることはできなかった」という彼は、体に劣等感と不安を持っていた⁹⁾。教え子とラグビーをしているときに潰した腎臓や結核のために健康に対する不安からなかなか逃れることはできなかった。彼の内側には、一步間違えば社会的に不適切なるものに彼自身を変えてしまう要因があり、そのことを彼自身十分意識していた。退化の要素を彼自身が持っていることを知っていたのである。それゆえに彼は余計に進化論を意識せざるを得ず、彼は自分を退化へと向かわせる内なる傾向を抑圧するために、それとは逆の方向を目指した。彼が描くものが、生まれ育った環境の逆を指向すると指摘されるのは、そのためである¹⁰⁾。彼もまた戻ってきたタイム・トラヴェラーと同じ問題を抱え、彼同様タイム・トラヴェラーと呼ぶのがふさわしい人間となったのである。

タイム・トラヴェラーは、四次元を説明しようとして次のように言う。「時間の中を動けないというのは間違っている。例えば、過去の出来事を鮮明に思い浮かべているとすれば、僕はその過去の出来事が起こった瞬間に戻っているんだ。……僕は一瞬過去に戻っているんだ」(第1章)。ウェ

ルズは、『タイム・マシーン』を、過去の出来事を思い浮かべることによる、内なる過去への時空旅行の隠喩として書いた。というよりは、忘れようとしても蘇る過去、思い出さずにはいられない過去、その中にいる自分を時空旅行家として描いた。

- 1) テキストは H. G. Wells, *The Time Machine* (London: J. M. Dent, 1993) を用いた。引用はすべてこの版から行い、引用箇所は章数を () 内に示した。
- 2) ハックスリーのウェルズへの影響については、D. Haynes, *H. G. Wells: Discoverer of the Future: The Influence of Science on his Thought* (New York: New York U. P., 1980), pp. 12-16, 21; Mark R. Hillegas, *The Future as Nightmare: H. G. Wells and the Anti-Utopia* (Carbondale: Southern Illinois U. P., 1967), pp. 18-21; Leon Stover, "Applied Natural History: Wells vs. Huxley," in *H. G. Wells under Revision: Proceedings of the International H. G. Wells Symposium London, July 1986*, ed. Patrick Parrinder and Christopher Rolfe (London: Associated U. P., 1990), pp. 125-33 参照。
- 3) Daniel Pick, *Faces of Degeneration: A European Disorder, c. 1848-c. 1918* (Cambridge: Cambridge U. P., 1989), p. 20.
- 4) Edward Said, *Orientalism* (New York: Vintage Books, 1979).
- 5) David Cairns and Shaun Richards, *Writing Ireland: Colonialism, Nationalism and Culture* (Manchester: Manchester U. P., 1988), pp. 42-57.
- 6) Peter Gray, "Punch and the Great Famine," *History Ireland*, 1 No. 2 (1993), 26-33.
- 7) Said, *Orientalism*, pp. 206-07, 227, 232-33.
- 8) H. G. Wells, "Human Evolution, An Artificial Process," *Fortnightly Review* 60 (1896), 590-95; Pick, *Faces of Degeneration*, p. 194.
- 9) H. G. Wells, *Experiment in Autobiography: Discoveries and Conclusions of a Very Ordinary Brain (Since 1866)* (London: Victor Gollancz Ltd and The Cresset Press Ltd, 1934), 2 vols, pp. 281, 582. (ページ番号は一巻二巻を通してのものである。)
- 10) Peter Kemp, *H. G. Wells and the Culminating Ape: Biological Imperatives and Imaginative Obsessions* (London: Macmillan, 1982), pp. 120-26.

(一橋大学助教授)